

1 はじめに

知道会報の第100号の特集として、1号から99号に掲載された連載コーナーの変遷から振り返りを行い、紙面に掲載した。

ここでは、スペースの都合上掲載できなかった小話や、通読しないとまず気が付かない、重箱の隅をつつくようなネタを紹介していきたい。まあ今回は会報用の原稿とはちがって web 公開記事ということなので、気楽に書くとしてよ。

2 『知道会報』以前

現在の『知道会報』以前にも、『知道』の名前を冠する機関紙の類は明治時代から存在した。紙面では詳しく紹介できなかったもので、ここで記載しておこう。

まず明治31(1898)~41(1908)年、知道会雑誌部刊行による『知道』があり、明治42(1909)年には、『知道月報』が創刊された(水戸中学知道会発行)。

その後、昭和24(1949)年、雑誌『知道』が復刊し、昭和29(1954)年には新聞『知道』が発行されたほか、同窓会とは直接関係はないが、卒業生による月刊誌『新知道』(昭和32(1957)~)などが刊行されていた。これら『知道』や『知道月報』は、現在も生徒が発行している『知道』に連なるものであり、『知道会報』とは系譜が異なる。「同窓会員の会報誌」という位置づけの機関紙が発行されるのは、昭和28(1953)年のことである。

同窓会組織「水中一高会」の結成は昭和26(1951)年のことであるが、昭和28(1953)年6月の幹事会で同窓会機関紙の発行が議決され、同年11月に発行されたのが、『知道会報』の前身『水中会報』である。正統の同窓会機関紙という位置づけの会報誌だったが、経費難から昭和31(1956)年刊行の第4号をもって廃刊となった。

昭和36(1961)年、木村伝兵衛氏が三代目会長になると、木村会長は組織強化や運営の円滑化のため、会報誌の復刊を強く望んだという。

そして、昭和47(1972)年、『水中会報』の復刊となる、現代の『知道会報』の第1号『水中一高会会報』が創刊されることとなるのである。しかしながら、木村会長はその悲願の復刊を見ることなく同年6月に急逝し、創刊号には木村会長を悼む特集が掲載されることとなった。



図 創刊号一面

3 オセロの話

紙面でも触れたとおり、1号から15号にかけては先輩会員のインタビュー記事「みなさんこんにちは-先輩・後輩紙上交歓-」が連載されており、多くの興味深い記事を見ることができる。その7号には、オセロの開発者として知られる長谷川敏(長谷川五郎)氏のインタビューが掲載された。

このインタビューにあるオセロ開発秘話が、現在伝わっている定説と異なっていて興味深い。オセロ公式 HP (https://www.othello.gr.jp/r_info/history/)によると、オセロの歴史の始まりは、戦後まもない水戸一高の青空教室にて、長谷川氏が「同級生たちと遊ぶゲームとして発案した」とあり、これが現在の定説である。しかし、この「みなさんこんにちは」コーナーで長谷川氏が語るところによれば、オセロの誕生は氏が就職してからのことであり、「会社の若い女子社員が昼休みに簡単に遊べるゲームとして発案した」とエピソードが全く違っている。開発者本人の言葉だけに信ぴょう性は高く、こちらが正しいとなれば定説は覆ることになる。水戸一高の教室で誕生したという話も本人の言説なのだと思うが、今となってはどちらが本当に正しいのかは分からない。いずれにしても、オセロ史を研究するのであれば、この『水中一高会会報』第7号は貴重な典拠資料となるのではないだろうか。

個人的には水戸一高が「オセロ誕生の地」であってほしいという思いはあるが、真実は、さて。



図 7号掲載の長谷川氏

4 レアな号

100号の中で他とはちょっと違う、「レアな号」について紹介する。タイトルロゴの変遷については紙面でも取り上げたとおりで、現在のロゴは二度目のリニューアル後の63号から使用されている。63号以降のこの3代目ロゴ、まったく同じかと思いきや、68号が微妙に違う。ゴシックが他の号と比べて明らかに太いのだ。

下の図の右側が68号のロゴである。左のロゴと比較してみると、その違いが見て取れるだろう。



図 68号ロゴ比較 (→が68号)

なぜこのような違いが生じてしまったのか考えてみると、当時急速に進んでいたIT環境の普及が背景にあるのではないかと思う。平たくいえば、パソコン環境への移行である。日本において西暦2000年前後を境にパソコンの普及率は急激に上昇したことは知られており、『知 道 会 報』編集もその流れの中、平成15(2003)年の63号からパソコンが導入されることとなった。

65号の編集後記で、その変化について次のように記されている。

「これまでは、手書きの原稿を前に、1行何文字で何行になるか、電卓片手に鉛筆と消しゴム、定規を駆使しながら割付用紙と格闘していたもの。今、会報のA4版化とともに、パソコンの画面に向かっての作業となった。」

「とは言っても、そこはやはり精密機械。ちょっと間違えると、すぐに機嫌を悪くしていわゆる“固まる”ってことになる。この号も、作業中何度固まったことか…。」

今となっては当たり前となったパソコンでの編集作業だが、当時まだ不慣れな環境に戸惑っている様子が見て取れる。68号のロゴの違いも、こうした環境の変化の中で、例えば普段と別のパソコンで作業したなどで、フォントの違いが生じてしまったのではないかと想像できる。

他とは違うレアな号ということであれば、平成24(2012)年の81号もレアだ。知 道 会 報 100号の歴史の中で唯一、「別刷」が付けられている。「今号は、学校や各同窓会からたくさんのお話・情報が寄せられましたので、本編に掲載できなかった分を別刷としました。」ということで、別刷には「一高だより」と「同窓会」が掲載されている。

これらの号を持っている人は、少しラッキーかもしれない。

5 クラブ倶楽部 CLUB の謎

38号から始まった、クラブ活動にスポットを当てる「**クラブ倶楽部 CLUB**」については紙面でも取り上げたとおりである。45号まで全7回にわたって、「史学部」「棋道部」「演劇部」「美術部」「ラグビー部」「理化学研究会」「写真部」が取り上げられた。

会報紙面では、例えば野球部の活躍が記事になることなどはあったが、紙上ではそれまであまり注目されなかった文化系のクラブ活動にも着目した点で新しい試みであった。ところでこのコーナー名、なぜか途中で変わっていて、「**クラブ倶楽部 CLUB**」(38~42号)、「**クラブ CLUB 倶楽部**」(43~45号)と、「CLUB」と「倶楽部」の語順が入れ替わっている。これは何か意図あつてのことなのか、それとも単に間違えてしまっただけなのか、今となっては分からない。

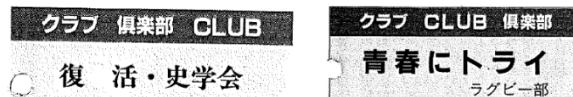


図 語順転倒。普通はまず気づかない

6 よく取り上げられる偉人

本紙のほうではスペースの都合上取り上げられなかったが、平成24(2012)年の第80号に「**教育遺産**」というコーナーがあった。そのはしがきに「**開校130年を超えるわが校には多くの古い(?)ものが残されています。見過ごされてしまったり、あるいは人目に触れずにあるものなども再発掘し、そこにまつわる話を交えて紹介します。**」とあり、その号では、「**武石浩玻像**」が取り上げられた。連載を想定していたことが伺える記述だが、しかしこのコーナーも、残念ながらその後「第2回」が掲載されることはなかった。

ちなみに過去の会報に取り上げられてきた本校関連の偉人としては、「**飛田徳洲**」と「**武石浩玻**」が多かった。特に武石浩玻は、像が校内にあったため、生徒たちにも馴染みが深かったのだろう。

「たびたび生徒のイタズラで水戸三高の方向に向きを変えられていた」というエピソードとともに語られることも多く、これは水戸一高生の「鉄板ネタ」のようなものだったのだろう。



図 80号掲載 武石浩玻像

7 特集記事について

紙面では、「連載コーナー」の変遷を追うことを主眼としてきたが、連載以外の特集記事についても簡単に触れておこう。次段に、節目の特集等について年表式の表にまとめてみた。

まずひとつの特徴としては、「100周年」をはじめ、「110周年」…「140周年」といった、10年ごとの周年事業がよく取り上げられていることである。大きな出来事なので当然といえば当然ではあるが、知道会報は年2回なので、およそ20号スパンで、周年事業が大きく特集されている。

また平成以降は、「座談会」がメインの特集になることが多かった。平成7(1995)年の「戦後50年」座談会などもそうだが、この座談会傾向は平成後期により顕著で、「女子会座談会」「同窓会を考える座談会」「140周年を迎えての座談会」など、折に触れて卒業生や在校生を交えての座談会が開催されている。

その他よく目についた特集は「交流」に関するもので、平成元(1989)年頃のインドネシア海外派遣交流事業、平成2(1990)年頃の秋田高校姉妹提携に関する特集等もよく大きく取り扱われた。

もちろん、校舎の歴史や江山閣についてなど、本校の歴史や場所に関わる特集が掲載されることも多く見られた。

8 広告について

そういえば、今号は久しぶりに広告が掲載されるようだ。実は過去の知道会報では広告がよく掲載されていて、1号～20号や30号～40号あたりに見ることができる。改めて見ると、多くの卒業生が様々な会社で活躍されていることがよく分かる。

<p>首都圏随一 本と文具 川又書店 代表取締役社長 川又銀蔵 (4820)</p> <p>本店 水戸市東町2-2-31 TEL.24-331780 秋新店 水戸市東町2-2-31 TEL.31-612892 東武店 水戸市東町2-6-33 TEL.25-11201</p>	<p>外科・脳神経外科・内科 胃腸科・放射線科 斉藤医院 斉藤 佐内 (8220)</p> <p>水戸市見川5丁目127-281 0292(51)2806</p>	<p>呉服・装具と本の専門店 ツルヤ 本店 水戸市東町2 TEL.24181105 ツルヤブックセンター 本店 水戸市東町1 TEL.050721180 赤家店 TEL.513110・千波店 TEL.417886 高級センター 赤川町南2 TEL.42551616・9811 代表取締役 小賢 武寿 (1920)</p>
--	--	---

図 8号掲載広告

表 主な出来事・特集略年表

和暦	西暦	主な出来事・特集記事等
昭和28	1953	※『水中会報』刊行
昭和31	1956	※資金難により『水中会報』廃刊
昭和47	1972	※『水中一高会報』刊行(第1号)
昭和47	1972	木村伝兵衛追悼特集(第1号)
昭和50	1975	「歩く会」特集(第5号)
昭和52	1977	本紙10号の歩み(第10号)
昭和53	1978	特集「水戸一高百年史」(第12号)
昭和53	1978	知道会館建築はじまる(第12号)
昭和54	1979	100周年記念事業特集(第14号)
昭和55	1980	※『知道会報』に改称(第16号)
昭和55	1980	第一回知道会ゴルフ大会(第17号)
昭和56	1981	母校の本格整備終わる(第18号)
昭和60	1985	科学万博人物展飛田穂洲に思う(第26号)
昭和61	1986	相撲道場建設に支援を(第28号)
昭和61	1986	飛田穂洲先生生誕100周年(第29号)
昭和62	1987	待望の相撲道場が完成(第30号)
昭和62	1987	水戸一高の自然環境(第30号)
昭和63	1988	武石浩波特集(第32号)
昭和63	1988	110周年記念特集(第33号)
平成元	1989	インドネシア派遣事業報告(第35号)
平成2	1990	秋田高校姉妹提携調印(第37号)
平成4	1992	全国高校生クイズ選手権大会優勝(第41号)
平成6	1994	座談会「校是を考える」(第44号)
平成7	1995	座談会「戦後50年」(第46号)
平成8	1996	会則改正への提言(第49号)
平成9	1997	江山閣特集(第50号)
平成10	1998	吹奏楽木管五重奏 全国大会金賞(第52号)
平成10	1998	長塚節の歌碑千波湖畔に建立(第53号)
平成11	1999	120周年記念事業特集(第54号)
平成11	1999	本城橋70年の歴史(第55号)
平成12	2000	新江山閣完成特集(57号)
平成14	2002	2002年茨城高校総体(第61号)
平成14	2002	クイズ王決定戦全国準優勝(第61号)
平成15	2003	※A4横書きに紙面刷新(第63号)
平成16	2004	「歩く会」の現在・過去・未来(第65号)
平成17	2005	「夜のピクニック」ロケ特集(第67号)
平成18	2006	座談会「これまでの10年これからの10年」(第68号)
平成18	2006	座談会「同窓会は何のため？」(第69号)
平成20	2008	130周年記念事業特集(第73号)
平成22	2010	座談会「新体制で臨む次の知道会」(第76号)
平成23	2011	※震災により4ページに紙面減(第78号)
平成24	2012	水戸一女子会スタート(第80号)
平成24	2012	※「別刷」刊行(第81号)
平成25	2013	女子座談会(第83号)
平成27	2015	座談会「140周年に向けて」(第87号)
平成28	2016	「夜のピクニック」を舞台化(第88号)
平成29	2017	海外派遣ボストン・ニューヨークへ(第90号)
平成29	2017	電子黒板設置(第91号)
平成30	2018	座談会「140周年を迎えて」
令和元	2019	140周年記念事業(第94号)
令和3	2021	硬式野球部大躍進(第99号)
令和4	2022	※通算100号刊行